

2020年10月11日

天の国の食卓

年間第28主日のマタイ福音書では「王子の婚宴」のたとえ話が登場しています。天の国はしばしば、イエスを囲む食事の場面として説明されますが、今日は改めて「天の国の食卓」について考えてみましょう。

教会で食事の場面といえば、有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」もしくは、ルカ福音書のエマオの弟子たちの食事の場面などが思い浮かびます。しかしわたしがこの「天の国の食卓」について強く意識した最初の瞬間は、数年前にフィレンツェにあるウッフィツィ美術館を訪れた時であったかもしれません。歴史的に重要な数々の絵画や美術品がひしめく中、わたしは信仰の観点で、一つひとつの作品がどのような意図《いと》を持って描かれたのか考えていました：

天使はなぜ顔と翼だけで表現されているのか？／使徒たちが手に持っているものは何か？／聖書のどの場面が題材となっているのか？

一日中、美術館の中を歩き回りながら、いくつもの食事の場面の絵画、特に「エマオの食卓」が複数、しかも異なる年代に描かれ続けているということに気づきました。恥ずかしいことに、はじめは、どうして「エマオの食卓の場面、天上の婚宴の場面がこれほど多くの作品の題材となっているのか？」すぐに理解できませんでした。しかし時間をかけてこれらの絵画を眺めているうちに「二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した」（ルカ24・35）という**復活の信仰とイエスとの出逢い**の場面が心の中にありありと浮かび、本当に多くの人々がイエスとの出逢いを待ち望んできたことが伝わってきました。それはまるで、今日の第一朗読のイザヤ書のように。

「その日には、人は言う。

見よ、この方こそわたしたちの神。

わたしたちは待ち望んでいた。

この方がわたしたちを救ってくださる。」（イザヤ25・9）

その食卓の場面から、**パンを裂く瞬間**（イエスとの出逢い）はいつの時代の人にとっても光であったこと、日常の小さな瞬間の中に神がともにおられるというミサのテーマも身近に感じられました。

「イエスは、たとえ話を通して、神の国に入るよう促しておられます。これはイエスの教えの特徴でした。たとえ話を用いて人々を神の国の祝宴に招き、同時に、根源的な選択を迫ります。すなわち、み国を得るためには、すべてを捨てなければなりません。ことばだけではなく、行動が要求されます。イエスのたとえ話は、人間にとっては鏡のようなものです。人はイエスのことばを固い土のように受け入れるか、それともよい土のように受け入れるか、いただいたタラントンで何をするのか、と問われます。イエスとこの世における神の国とが、それとなく話の核心に隠されています。」
(『カトリック教会のカテキズム』546項)

今日も明日も、イエスさまはわたしたちを神の国の祝宴へと招いてくださいます。「見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい」(マタ22・9)。天の御父のみ旨を知り、信仰を生きる恵みが与えられますように。日ごとの糧に感謝して、新しい一週間をはじめましょう。

「神はわたしを緑の牧場に伏させ、
いこいの水辺に伴われる。
神はわたしを生き返らせ、
いつくしみによって正しい道に導かれる」(詩編23)

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝

●年間第28主日聖書朗読箇所：

- ① イザヤ25・6-10 a
—答唱詩編—詩編23より
- ② フィリピ書4・12-14、19-20
- ③ マタイ22・1-14